EXTRA ECCLESIAM SALUS

聖書知識

創刊號

寄贈

昭和五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

塚本虎二主筆

目次

私の野心
若しイエスが日本に來り給うたならば
聖書入門
丸の内講演
何故私は基督教を信ずるか
基督教の本質
イエス語集
ヨハネ傳の讀み方
譬話とは何ぞや

昭和五年（一九三〇年）一月

私の野心

明治六年耶蘇教禁制の高札撤去せられてより六十年、我國に於ける基督信者の現數は二十五萬と言はれる。佛教、神道の深く根を張りしこの國に於て、よくも斯くまでに基督教が根を下ろせしものと、我等は、啻高くキリストの福音を叫んで、眠れる國人をその深き眠より喚び覺ませし尊敬する內外の先輩傳道者諸君に對し、深甚の感謝を捧ぐる者である。

しかし、二十五萬とは、教會の名簿に登錄せられし信者の數である。故に「この檻のものならぬ他の羊」あることを忘れてはならぬ。彼等は何等かの理由により教會に往き得ず、または、往くことを欲しない。ローマ天主教に於ては「教會の外に救なし」と言ふ。しかし新教に於ては「教會の外に救あり」Extra ecclesiam salus と主張する。教會員たることは救の必要條件ではない。故に、少くとも我等新教信者は、檻の外に止まらんとする信者を、强ひて檻の中に引張り込む必要はない。また、引張り込むべきでない。

本誌は斯かる檻の外なる人々の友であり度く思ふ。彼等と共に、靜かに、深く聖書を學び、彼等の信仰の友たらんことを期する。このことは、教會の向ふを張らんとするのでは勿論ない。これは我等が異邦人にゆき、彼らが割禮ある者に往かん爲なり」との使徒パウロの心である。我等の唯だ一つの願は、一人にても多くの人に、十字架の福音を傳へ、この暗き、冷たき世界を、少しにても光輝と、愛とに滿つる世界と爲さんとするにある。ただそれだけである。以外でなく、以下でなく、以上でない。

これが私の野心である。まことに小なる野心である。しかし、キリストの鑑に叨められたる野心であると思ふ。

聖書知識　第一號　一九三〇年一月

若しイエスが日本に來り給うたならば

（創刊の辭）

二三年前或る知名の英國の宗教家が「若しイエスがロンドンに來り給うたならば」If Jesus came to London なる論文を雜誌に揭げたことがあつた。イエスはロンドンの基督諸教會を遍歷した揚句に、「若しこれが基督教であるならば、少くも私はクリスチヤンではない」と言ひ給ふであらう、と其の宗教家は結論した。

若しイエスがわが日本に來り給うたならば、私は思ふ、彼は日本の基督教の餘りに米國臭く、英國臭く、凡て餘りに西洋臭きに、鼻を撲み給ふであらう。而して、「自分はこんなバタ臭い基督教を日本人に傳へる積りではなかつた」と言ひ給ふであらう。

日本のイエスは、英國のイエス、米國のイエス、ガリラヤ湖畔のイエスと全く別のイエスでなければならぬ。彼は生粹の日本人でなければならぬ。彼の頭髮は黑いであらう。彼の顏はダ・ヴインチ、ラフアエルの描きしイエスと異り、頰骨高く、土色であるであらう。勿論彼は日本語を話し給ふ。必ずしも大工の子であるとは限らない。漁師の子、會社員の子であるかも解らない。「誠にまことに、われ汝等に告ぐ」と言ふ樣に仰有らないかも判らない。「學者、パリサイ人」と言ふ代りに、「牧師、傳道師」と言ひ給はないとは保證出來ない。

黑ン坊が描くイエスの顏は眞つ黑であると言ふ。それでこそ眞のイエスである。アメリカン・インデアンのイエスは銅褐色であり、西洋人のイエスは白皙であり、日本人のイエスは土色でなければならぬ。

イエスが凡てに於て生粹のエダヤ人であり給ひしごとく、我等クリスチヤンも亦生粹の夫々の國人でなければ

ならぬ。ルーテルは生粋の獨逸人であつた。ミルトンも生粋の英國人であつた。それならば、我等日本のクリスチャンも亦生粋の日本人でなければならぬ。而して生粋の日本人たらんが爲には、伯夷叔齊が周の粟を食まざりし如く、ローマのパン、英國のパン、亞米利加のパンを食つてはならぬ。日本の米を食はねばならぬ。

基督教は生ける宗教であり、世界的宗教であるが故に、飽くまで各國獨自の國產品でなければならぬ。キリストの靈が直接に、聖書を以て、わが國人の心に植ゑつけしものでなければならぬ。亞米利加の基督教は、假令彼等には基督教でありても、その儘わが國に輸入さるるときに、夫れは一の異教に過ぎない。

基督教我國に傳來してより既に六十年、何時まで我等は西洋人の排泄物を食はんとするのであるか。何故直接キリストに往き、聖書に往かないか。何故國產の基督教を求めないのか。政治家ですら之に氣付いてゐるではないか。我國に眞の國產基督教の生れぬ限り、若しイエスが我國に來り給ふならば、ロンドンのイエスと同じ嘆聲を發し給ふであらうことを私は感れる。

この故に、今私は慣れないペンを取り上げる。ペンは鐵槌の如くに重い。しかし、イエスの靈が之を私に强ひる。私は默して從ふ。

勿論、私は私の敵を知る。彼等は私の無謀をあざみ笑ひつつある。彼等はその爪を磨ぎつつある。しかし今詩人ホイツチャーの言が私を力づける——

往け、短劍の切先が
汝の小徑の黑暗に閃くでもあらう。
そこに汝を恐ろしく威嚇する運命
それは光榮ある殉教である！
さらば進め、殉教者の熱心を以て。
しかして、もはや人、人に聽かず、
ただ神のみ主たり給ふその時
汝の受くべき確かなる褒賞を待て！

キリストに對し、我が祖國に對し、私の愛の積かん限りは、私のペンも亦私の手より落ちないであらう。神は私を助け給ふであらう。

聖書入門

すべての宗教に經典がある。禪宗の如く不立文字を稱へて、文字、言句を否定する宗教なきにあらねど、それは寧ろ極めて稀なる例外である。從つて基督教にも經典がある。基督教の經典を邦語にて「聖書」と言ふ。「聖書」は英語の Holy Scriptures の譯語であつて、神聖なる書の意である。しかし何れの宗教の經典も、すべて神聖であると考へらるるが故に、この語は凡ての宗教の經典にも同じく用ひられる。從つて基督教の經典たることを明白にするためには、英語にては、特に大文字を以て書き、或は所謂定冠詞を附するを常とする。

普通に基督教の「聖書」をバイブルと言ふ。これは英語の Bible の音寫であるは言ふ迄もない。獨逸語にてビーベルと言ひ、佛蘭西語にてビーブルと言ひ、伊太利語にてビブリヤと言ふ。凡てギリシヤ語及びラテン語のビブリヤ biblia より轉來したものであつて、「本」を意味する。ただ玆に興味多きことは、ギリシヤ語にてビブリヤは數冊の本を意味するに反して、ラテン語のビブリヤは單に一冊の本を意味し、このことが偶々聖書の性質をいみじくも言ひ表はしてゐることである。即ち聖書は一冊の本であり、同時に數冊の本である。創世記より默示錄に至る六十六卷の書は、殆ど千五百年の永きに亘り、四十人以上の著者、時代を異にし、民族を異にし、言語を異にし、地位、職業を異にする人々によりて、各自獨別の見地と信仰と主張とを以て書かれたものであつて、この意味に於ては、まさに天下一品の一大叢書である。多數の本の集團である。ギリシヤ人は、この立場より見て、之をビブリヤ（數冊の本）と言うた。しかし、これと同時に、斯くも大なる本の集團が、或る見地からすれば、恰も同一の人が、同一の時に、一氣呵成に書き下せしものであるかの如き、生々たる一の脈動を感ずる。即ち最も完全なる一冊の本である。多分世の中に、これ程に一の生命を以て貫徹せられ、完全なる有機的統一を爲せるものはあるまい。ラテン語は此の點より見て、之をビ

ブリヤ（一冊の本）と言うた。實に聖書はビブリヤである。數冊の本であり、また一冊の本である。このことを知ることは聖書の性質を知る上に肝要である。

聖書は六十六卷より成つてゐる。內、舊約聖書三十九卷、新約聖書二十七卷。（「三九、二十七」と言ひて容易に暗記することが出來る）。その分量に於て新約は舊約の三分の一に足りない。

舊約三十九卷は便宜上、之を歷史、詩、預言の三部に分つことが出來る。

- 歷史
  - 創世記よりエズラ書まで（十七卷）……
  - ヨブ記より雅歌まで（五卷）……
- 詩
- 預言
  - 內
    - イザヤ書よりマラキ書まで（十七卷）……
    - イザヤ書よりダニエル書まで（五卷）……四大預言
    - ホゼ書よりマラキ書まで（十二卷）……十二小預言

歷史は天地の創造に始まり、イスラエル民族の發生、成長、衰落を敍して、エルサレム神殿再建の時代（紀元前五一六年）に至る。神の民イスラエルが、如何に神の前に歩いたか、神が如何に彼等を教育し給うたかを書いた、主として客觀的の記錄である。創世記より申命記に至る五卷を普通に「モーセの五書」と言ふ。

詩は、神を信ずる人々の喜び、悲しみ、痛み、感謝、惱み等凡ての心の姿、動きを描きしものである。神の聖教育に對する人間の側よりの反響である。從つて主觀的であるは言ふ迄もない。

豫言とは神が特に選びし人々を以て語り給ひし啓示を集錄せしものである。王國分裂（紀元前九三七年）頃より前四三〇年頃迄に出でし十六人の豫言者のものである。大小豫言の區別は、書の分量の大小に關するものであつて、豫言者または書の品質內容に關するものではない。

次に新約聖書は二十七卷より成る。舊約に倣ひ之を歷史、書簡、豫言の三部に分つを記憶に便とする。

- 歷史（五）
  - 福音書
    - 共觀福音書
      - マタイ傳
      - マルコ傳
      - ルカ傳
    - ヨハネ傳
  - 使徒行傳

- 書簡（二十一）
  - 牧會書簡
    - テトス書
    - ピレモン書
  - 獄中書簡
    - ピリピ書
    - コロサイ書
    - エペソ書
    - ガラテヤ書
    - コリント前、後書
    - ロマ書
    - ヘブル書
    - ヤコブ書
    - ペテロ前、後書
    - ヨハネ第一、二、三書
    - ユダ書
  - 四大書簡（パウロの）
  - 獄中書簡（パウロ書簡（十三））
  - 一般書簡（七）
  - テサロニケ前、後書
  - テモテ前、後書
- 豫言
  - 默示錄……
- 一　歷史は福音書と使徒行傳より成る。「福音」はギリシヤ語のユーアンゲオン Euangelion の譯語である。原語は「喜ばしき音づれ」「吉報」「喜信」を意味する。イザヤ書第四十章に豫言せらるる、人類の罪の贖敎に關する神よりの「よき音信」である（九節）。英語にて God-spell と言ふ。「善き話」Good spell の意か、「神の話」God-spell の意であるかは學者の意見が一致しない。「福音」なら譯語は、支那譯を假用したものである。

福音書は、また之を四福音書と言ふ。キリストの地上生涯に於ける言行を敍錄したものである。マタイ傳、マルコ傳、ルカ傳を「共觀」と言ふは三書の誌す所が內容外觀共に大同小異であるからである。共觀とは「共同に觀たる」の意である。英語の Synopsis の譯である。ヨハネ傳は之に對し全然別箇の立場、觀察よりキリストを描いた。マタイ傳以下ヨハネ傳を順次に夫れ〴〵第一福音書……第四福音書と言ふ。何れにせよ、四福音書何れも各自獨立せる完全なる福音的キリスト傳である。その何れによるも完全にキリストの福音に達する事が出來る。恰かも、御殿場口、須走口、吉田口、大宮口の何れによるも富士山頂を極め得ると同樣である。しかし、この四

つの登山口の凡てを試むるときに、より完全に富士山を知り得ると同じく、四福音書凡てによるときに、より完全に、キリストの福音を極め得るは言ふ迄もない。

マタイ傳は十二使徒の一人なる税吏マタイの書きしものと傳へられる。マルコ傳は使徒パウロの友人、また使徒ペテロの通譯たりしマルコの書きしもの、ルカ傳はパウロの友人なる醫者ルカの書きしものである。ヨハネ傳は使徒ヨハネの書きしものと言はれる。

次に使徒行傳は昇天したるイエスがその使徒達を以て地上に福音を傳播せしめ給うた歴史的の記錄であつて、イエスの昇天より、パウロのローマ監禁の時に及んで居る。使徒達の行跡を誌した傳記の意である。ルカ傳と同じく醫者ルカの書きしものである。

（念のために言ふ――マタイ傳、マルコ傳と言ふは、「マタイ又はマルコの書き傳へたるキリスト傳」の意であつて、使徒行傳の傳と全然別意である）。

二 書簡の部は二十一卷より成る。ロマ書以下ピレモン書まで十三が使徒パウロの書きし手紙である。ロマ書よりテサロニケ後書までの九つは、歐亞の七つの教會に宛てられたるものである（默示錄にある、アジアの七つの教會に宛てしイエスの手紙のことを思へ）。ロマ書とは「ロマ人、或はロマ教會に宛てたるパウロの手紙」の略稱である。以下皆同樣である。テモテ前書よりピレモン書まで四つは、夫れ〳〵パウロの友人また弟子たるテモテ、テトス、ピレモンに與へし手紙である。內、テモテ前書、及び後書、テスト書は、教會を牧するに就ての心得を書きしものである故に、學者は之を牧會書簡と言ふ（Pastoral Epistles）。またロマ書よりガラテヤ書までの四つは、內容に於ても分量に於てもパウロ書簡の基礎を成すものであるが故に、之を基本的四大書簡と言ふ。エペソ、ピリピ、コロサイ、及びピレモンはパウロが、ローマ入獄中に書きしものである故を以て、獄中書簡と言ふ。尙十三書簡は主として分量の大小に依り、大を先にし、小を後にしたに過ぎない。

ヘブル書はクリスチヤンなるヘブライ人に宛てしものである。筆者は、或はパウロと言ひ、或はバルナバ、或は

アポロと言ふも未だ學者の定說なし。

次にヤコブ書はイエスの兄弟なるヤコブの書きしもの、ペテロ前、後書は使徒ペテロの書きしもの、ヨハネ第一、第二、第三書は何れも使徒ヨハネの書きしものとせられる。最後にユダ書はイエスの兄弟なるユダの書きしものと信ぜられる。これ等七卷を「一般書簡」General 又は Catholic Epi. と言ふは、特定の教會又は個人に宛てられしものでないからである。

以上二十一書簡は、大體に於て純然たる私書であり、當座の用に當つる爲めの獨逸學者の所謂「臨機的の手紙」Gelegenheitsbrief である。著書ではない。福音の眞理を明かにし、また信者達を慰め、勵まし、力づくる爲めに書かれしものである。

三 豫言はヨハネの默示錄である。パトモス島にありし使徒ヨハネに啓示せられし豫言を記錄したものである世の終末に於ける最後の審判、神の國の實現に至るまでの大なる豫言であると同時に、之を以てローマ政府の大なる迫害に苦しみつゝ、而かも勇敢に之と戰ひつつありし信者達を勸め慰め、忍耐を說きしものである。

以上が聖書の概觀である。尙、舊約とは舊き約束、契約の意味であり、新約とは新しき約束、契約の意である。英語にて Old Testament, New Testament と言ふ。この名稱は紀元二世紀の終頃迄にクリスチヤンによりて鑄造せられた。コリント後書第三章に於てパウロは既に此の語を用ひて居る。

神は其選民たるユダヤ民族に對し、アブラハム、モーセ、ダビデ、其他の豫言者達を以て度々契約を爲し、若し彼等が神の言、特にモーセを以て與へられた律法を遵守するならば、彼等は永遠の王國を與へられるであらうと言ひ給ふた。殊に一人の救世主（ヘブル語にて**メシヤ**、ギリシヤ語にて**キリスト**）が出でて、彼等を救ひ、彼等を永遠の幸福に入るべきことを豫言し給うた。即はち舊約聖書は創世記の始めより、マラキ書の終りに至るまで、救世主來臨の豫言であり、約束である。ユダヤ人等は堅くこの神の約束を信じた。然り、今日に至るまで之を信じ續けて居る。この信仰に生きる宗教をユダヤ教と言ふ。

即はち我等クリスチャンの言ふ舊約聖書は、ユダヤ民族の聖書であり、ユダヤ教の經典である。

然るに彼等が斯かる信仰に生きつつある間に、今を去る千九百年前に、パレスチンの北部、ガラリヤのナザレの村の大工ヨセフにイエスなる者が生れた。彼は自らイスラエル人等が待ち望みつつある救世主、メシヤ、即はちキリストなりと宣言した。ユダヤ人は驚き且つ怒り、神を謗瀆する者であるとして、彼を十字架に釘けた。併し少數の者はイエスの言を信じて、彼を神が二千年に亙りユダヤ人に豫言し給うた救世主キリストであると爲した。斯くして基督教は生れ、今日に至つた。

イエスが果して來るべきキリストであつたか否は、永遠の問題として殘される。たゞ面白きことは、ユダヤ人は舊約聖書を引用してイエスがメシヤに非ざることを論證せんとし、クリスチャンは、同じ舊約聖書を以てユダヤ人を反駁して、イエスのキリストなることを證明した。敵も味方も同じ舊約聖書を武器として戰つた。初代教會に於てはユダヤ教と基督教とは同一の聖書舊約をその經典とした。

しかし時が經ち、クリスチャンの數が增加し、またその分布が擴まるにつれて、文筆を以てキリストの言行を傳ふるの必要が生じて、多數のイエス傳が書かれた。また使徒達が諸教會また個人の信仰を扶け勸める爲めに多くの手紙が書かれた。而て之が遂に一冊に集錄せられ、これが基督教の聖典となつた。而て信者達は、神のユダヤ人に對する約束はキリストの來臨によりて更改せられた、即はちキリストが最後晩餐の時に爲し給ふた約束を以て、舊き神の約束に代るものと信じたが故に、言ひ換ふれば、人は舊き約束なるモーセ律法を守る代りに、キリストを信ずることに由りて、永遠の生命に入り得ると信じたが故に、彼等はこの特有の聖典を呼んで「新約」と言ひ、在來のものを、之に對して「舊約」と言うた。併しこの名稱は、基督教の立場よりしたるものであつて、ユダヤ教に於ては勿論新約を認めない。また彼等の聖書を舊約とは言はない。彼等には唯一つの約束、一つの聖書があるのみである。

丸の内講演（筆記）

第一講　何故私は基督教を信ずる乎

何故私は基督教を信ずるか。佛教があり、神道があり天理教があり、黒住教等々夥しき宗教があるのに何故私は此等を信じないで、基督教を信ずるのであるか。また宗教以外にあても、或は哲學、或は道德、或は藝術、或はマルキシズムと、種々なる思想、修養の途があるに拘らず、何故私は凡て此等のものに依らないで、ただ基督教のみを信ずるのであるか。

しかし「何故」Why を述る前に、「如何にして」How を語らねばならぬ。如何にして私は基督教を信ずるに至つたか。——過ぎし日の自分に就て語るは辛きことである。併し神の言を述ぶる者の義務であるが故に、敢て之を語らう。

四十五年前私は九州の或る片田舎に生れた。祖父は熱心なる神道と佛教との信心家であつた。兩手の指を以て數へ得ぬほどの神佛に毎朝毎晩お神を上げ、お燈明を點ずるのが私の日課であつた。私は信心深く之に從事した。中學時代編閲に出で、英語研究の目的を以て或る外國宣教師の許に通つた。この時始めて基督教に接した。其後友人に引張られてメソヂスト派の米國宣教師の說教を聽いた。聽くこと二三回にして、早くも彼は私に洗禮を受けよと言うた。未だ判らぬから受けぬと斷つた。受ければ判るから受けよと强ひた。私は彼に「左樣なら」をした。これが私の米國人嫌ひ、また無教會の發端である。後、聖公會の監督ABハツチンソン先生につき聖書を學んだ。先生は諄々として私にキリストのことを說いて吳れた。併し私は之を信じ得ず、中江兆民の無神論、井上哲次郎氏の基督教反對論を讀み、友人のクリスチャンをいぢめた。

高等學校時代東京に出た。二三回教會に出席した。學校では基督教及び佛教の兩青年會に入會した。併し極め

て不熱心であつた。併し一夜、青年會に於て石川角次郎先生のルカ傳第十五章の放蕩息子の話を聞いた時、私の兩眼から熱い涙が流れた。何だか神様があり相に思へて來た。しかしキリストが邪魔であつた。また奇蹟をどうしても信じ得なかつた。基督教よりも、井上、中江の方が正理であり相に思はれた。しかし間も無く十錢を奮發して買ひ求めた内村鑑三先生の「基督教問答」を讀み、「今の若い者共が基督教を聞いて迷信呼ばはりをするは片腹痛い」と吐鳴り付けられて、奇蹟も亦あり得べき事のやうに思はれて來た。しかしキリストが神の子であるとはどうしても考へられなかつた。

しかし、神の私かに定め給うた時は來た。明治三十九年、一高二年の二月十日。その日の夕方、私は獨り大學の池のほとりに聖書を讀んだ。所謂「御殿」は落陽に黄金と輝り映え、私にはエルサレムの宮かと思はれた——其當時私は徳富蘆花氏の「順禮紀行」を讀みつつあつた、聖書を讀みながら、何時とは知らず私は深き眠に落ちた。……忽ち夢が破れた。私は深い霧に閉ぢ籠められて居た。しかし後ち此の深い霧を破つて一道の光が上より私を照らすと覺えた。而して神とキリストと私とが光の一直線上に立つを覺えた。私は夢見る者の如くであつた。夢は覺めて、さめなかつた。

私は——斯く語りつつ私は深く慚ぢる——私は池に下り立ちて、自ら自分の頭に水を注いだ。これが私のバプテスマであつた（其の後私は勿論教會に於てバプテスマを受けない）。私はエマオの二人の弟子の如くに、心が内に燃ゆるを感じた。聖書が解り出した。凡ての人が兄弟の如く思はれはじめた。私の全生涯中最も忘れ難き幸福なる時が續いた。

四十二年十一月、法科大學三年生として、私は内村先生の聖書講義を聽くに至つた。爾來二十年、私は先生の門下に育てられた。

四十四年大學を卒へて農商務省に官吏となつた。此の頃より私の聖書研究は始まつた。ギリシヤ語を學び、註解書を讀み出した。併し何う最負眼に見ても、何處がクリスチヤンだか判らない生温き、俗臭紛々たる信者であ

つた。それでも數回市中の講壇に立ち信仰の告白を爲したこともあつた。

大正八年、三十五歳。人生の旅路の中半、私も亦嗜き森の中に迷へる自分を見出した。私は凡ての反對を押し切つて役人生活を止めた。私は聖書の研究に私の全生涯を捧げんと覺悟した。私はロッテルダムのエラスムスの「私は全生涯を聖書研究に捧げる」との句を私の生涯の標語と爲やうと思つた。併し、たとひどんな事があつても、傳道だけは爲まいと覺悟した。また之を公言した。

私は湘南に隠退して、聖書と首つ引の生活を始めた。二三年それが續いた。併し神は斯かる微温的な、吾儘な生活を許し給はなかつた。給ふ筈がない。大正十二年の關東大震災が私にも神の烈しき鞭であつた。

神は無慘にも、理不盡にも、私より私の最愛のものを捩ぎ取り給うた。私には神が解らなくなつた。世の終末かと思はれたあの凄慘な、無慈悲な、神の仕打を見て誰が神を信じ得やう。神の愛を信じ得やう。私は天を呪うた。神は愛ではない、慘酷である、淺薄道であると思うた。しかし、炎々たる焔、濛々たる黑烟を仰ぎ見ながら、ペチヤンコになつた家の前に坐して思ひ惱みつつあつた時に、忽ち一つの靜かなる、細き、併し、つよき聲が響いた——神は愛なり！と。

私の眼から鱗の如きものが落ちた。私は私の兩肩から大きな重荷が、地響して地上に落ちるのを感じた。私に始めて神が解つた。神の愛が解つた。神が愛であり給うのは、人が彼を愛と認めるからではない、神が愛であり給うからである。人に如何に慘酷に見えても、淺薄道に感ぜられても、彼自身は常に愛であり給ふ。神が人を審判するのであつて、人が神を審判するのではない。物指は彼に在るのであつて、我等にはない。この事が私に解つた。私は始めて顏を合せて神と語つた。

これが私の全生涯の分岐點であつた。私は生れ更はつた。「人若しキリストに在らば新に造られたる者なり。古きは既に過ぎ去り、視よ新しくなりたり」との聖句を讀んだ時に感謝の涙が流れた。「われ汝の事を耳にて聞ねたりしが、今は目をもて汝を見たてまつる」とのヨブの言

が私の實感となつた。聖書が生きたる書となり、私の書となつた。私は自分の中に奇しき力の湧ぎるを感じた。私はじつとしてゐられなくなつた。前言を翻して私は傳道生涯に入つた。入るべく神に強要された。斯くて今日に至つた。而して今この高壇に立つ。

以上が私の「如何にして」クリスチヤンとなつたかである。私はたゞ呆然として神の奇しき御手の動きを傍觀するのみである。

然らば私は「何故」基督教を信ずるか。

此の問題に答ふるに先ちて、念のために一言を要するのは、私は信ずべき理由があつて信じたのではないことである。右の「如何にして」が示す樣に、神は私が求めざるに、然り、私が欲せざるに、强ひて私に御姿を顯し私を信仰に入れ給うた。私が神を發見したのではなく、神が自ら私に顯れ給うた。私が神を選んだのでなく、神が私を選び給うた。而してこれは私一人の場合のみでなく、眞に神を信ずるすべての人の場合皆同樣である。（ヨハ十四の二〇、十五の十四以下。）解つて信ずるのでなく、信じて解るのである。信ずべき理由があつて信ずるのではなく、理由なきに信じて、後に信ずべき理由が解るのである。從つて次に掲ぐる私が基督教を信ずる理由、基督教でなければならぬ理由も、私が基督教を信ずるに至りし理由ではなくして、信じて後に發見した理由である。故に私の言ふ理由は、既に信じたる人に取りては當然自明のことであり、未だ信せざる人に取りては珍奇漢糞の唐人の寢言と聞えるであらう。

私が基督教を以て唯一の宗教であり、人の依るべき唯だ一つの途であるとする理由は、極めて簡單である。

理由の第一は、基督教の中に、然り、キリストの中に、キリストの十字架の中に、萬物がことごとく包藏されてゐて、キリストを信ずる者は、凡て之を自分のものとすることが出來るからである。「或は世界、或は生、或は死、或は現在のもの、或は未來のもの、皆なんぢらの有なり」と使徒パウロが言ふやうに、キリストを信ずる者は、天上天下ありとあらゆるもの、見ゆるものも見えざるものも、悉く之を自分の有とすることが出來る。知識も、道

德も、凡ての力も、富も、宗教も、哲學も、思想も、藝術も、社會運動も、然り、アブラハムも、モーセも、イザヤも、ソクラテス、プラトン、カントも、ホーマー、ダーテも、ブラクシテレス、ミケル・アンゼロ、ダ・ヴインチも、孔子も、釋迦も、達摩も、マルクスも悉く我等のものであるからである。キリストの十字架を有つことは神御自身を有つことであり、神の相續人となりて、宇宙萬有を相續することであるからである。エペソ、コロサイ書、ロマ書八章等が之を敎へる。

「ヤソの十字架に萬物が蔵つてゐるなどと、そんな馬鹿げたことがあるか！」と世の人は嘲り笑ふであらう。勿論馬鹿げたことである。私自身、幾年も斯く嘲り笑つた。しかし今この事は私にとり、また凡ての眞のクリスチヤンに取り、ヨハネよりも明白な眞理であり、私が私の心臟を有てるだけ確かな事實である。何を疑ひても、この事實だけは疑ふことが出來ない。我等が我等の有てる何物にても、たとひ我等の生命にても、自分の妻子にても、若しキリストの爲めであるならば、微笑みつつ之を犧牲とすることが出來るそのことが、我等が夫れ以上の尊きものをキリストに於て有てることの、何よりも確かな證據である。

理由の第二は、斯かる無限の富をわが有とするのに、何等の對價、努力を必要とせず、ただ「下さい」と言ひて手を出すだけで善いからである。今の世智辛き世の中に於ては、コップ一杯の水にも代價を拂はねばならぬ。殊に我等が最大の關心事とする道德的完全を得るが爲めには、我等は全生涯を犧牲としても到底之を獲ることは能きない。曾て地上に生存せし如何なる聖人も君子も、道德的完全に達し得なかつた。況んや我等凡人おや。しかし基督教を以てすれば、何等の努力、對價なしに、之を自分のものとすることが出來る。私は、少くとも私は私の無力を知る。私の財布は空虛である。私は道德的プロレタリヤである。否私は罪人の首である。私は道德的破産者である。若し自分の奮發、努力、修養に依らざれば、道德的完成の道が無いとするならば、私は永遠に道德的完全に達することはできない。私はユダの如くに

自ら縊る外はない。實際キリストの十字架を發見するまで、また發見せし後に於ても眞に十字架に生くるまでは、私は幾度死を決したか。淺間の噴火口に投ぜんとしたか。他人は兎もあれ少くとも私に取りては、空手にて、一文なしにて、この道德的完全を與へらるる基督教以外に、私の行くべき途は無い。これ私が、基督教でなければならぬと言ふ理由の第二である。

從つて若し基督教に於ても、カトリツク教（ローマ天主教）が言ふ如く、ただ手を延して之を頂戴するのみではいけない、即ち信仰だけでは不充分であつて、信仰の外に善き行を必要とすると言ふならば、私は今直ちに基督教を棄てる。私は之を公言する。しかし私の解する所によれば、少くともルーテルを以て始まるプロテスタント教（新教）、即ちキリストの傳へ給うた儘なる基督教によれば、我等が救はれて神の子となるには、ただ信仰のみを以て十分である。以外でなく、以上でなく、以下でない。「われ信ず」と言ひて身を十字架の下に投げるならば、それにて十分である。從つて私に取りては、

信仰のみでよいか、信仰以外に何物かを要するかは、死活の大問題である。故に私は生命をかけてカトリツク主義と戰ひ、「信仰のみ」の信仰を高唱せんとするのである。

尙ほ最後に一言すべきことは、世に次の樣な考を有つ人の非常に多いことである。彼等は言ふ——「君の言ふ所は善い。しかし何もそんなに狹く、基督教でなければならぬと言ふ必要は無いではないか。『分けのぼる麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな』である。佛教でも、金光教でも、哲學でも、マルキシズムでも善いではないか。どの途最後には、同じ眞理の高嶺に上るのだから。一人一人の好き好き、向き向きで善いではないか」と。勿論、分け登る麓の道は多いであらう。然し同じ高嶺の月を見得ると誰が保證する。淺間山に登るにしても多くの登山口がある、吾妻口、小諸口、御代田口、追分口、其他どの口を選ぶべきかは、自分の足と相談の上の事である。殊に、どうせ頂上を目がけて上るのだからと言ひて、道も無い藪の中から上り始める人は、必ず野垂死をするであらう。

眞理の山登りも亦同樣である。古往今來、果して誰がキリストロより登らずして、眞理の山、道德の峰の絕頂を極めたか。ソクラテスか、孔子か、カントか、マルクスか。私は淺間の鬼押出しの岩の如くに、累々として古今の英雄等の死體の横はるを見る。勿論、やり度い人はおやりなさいである。藪の中からでも谷底からでも。私はその意氣を壯とする。しかし、その無謀を憐れむ。

しかるに、玆に基督教なる登り口がある。千九百年の間多くの人に踏み均された、平坦な、決して迷ふことのない、而かも一番の近道がある。これは如何なる足弱も、心臟の劣弱な者も、老人も、小娘も、否、嬰い者であればあるだけ易々と登ることは出來る。しかし、不思議にも人は仲々この道を選ばない。何故であるか。それは、この登山口にては最初に謙遜の谷を通らねばならぬからである。自分の足と心臟との強さに對する自信と、誇とを擲たねばならないからである。他人は知らない。少くも私だけは、基督教ロのケーブルカーを以て登る。私は自分の足の弱さを知るからである。親鸞聖人の言ふ如く、

「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と思ふからである。私は足腰の強き人を羨やむ。しかし私は身の程を知る。

勿論このことは、他の宗教、道德、哲學、社會思想等を否定し、または、之を輕視するのではない。使徒ペテロが「汝等この言を（豫言を）暗き處に輝く燈火として、夜明け、明星の汝等の心の中に出るまで顧るは善し」と言ひしやうに（ペテ。後書一の十九）これ等のものも亦、行燈であり、提燈であり、電燈であつて、太陽の出るまで、暗を照すに必要なる器であつた。これありしが故にこそ、眞の義の太陽なるキリストの出る前に於ても、人類は暗黑の中に微かながらの光明を有つたのである。否、既に太陽の出でし後に於ても、之等のものが、多くの場合に役立つ。我等は、勿論大なる愛と尊敬とを以て道德を見、哲學を見、藝術とマルキシズムとを見る。この點に於て我等は何人にも劣らうと思はない。併し、要するに、これ等凡てがキリスト教の中に包容されあることを否み得ない。彼を以て之に置き換へることは出來ない。

第二講　基督教の本質

今日の學者に基督教の本質如何と尋ねるならば、彼等は直ちに數百頁の本を書くであらう。しかし、基督教が眞に世界的の宗教であり、萬人の宗教であるならば、そんなに難かしいものであつてはならぬ。知識的ブルジョアのみに了解出來るものであつてはならぬ。それこそ如何なる無學者にも、或は瀕死の病人にも、五分間、十分間を以て說明の出來るものでなければならぬ。

また教會の先生方に、如何したら基督教が解るかと訊くと、「さうですね、まあ聖書を讀むんですね」と言ふ。しかし「まあ聖書を讀むんですね」と言うた所で、新舊約聖書千二百章、四六版二千頁を讀破することは、並大抵た事業ではない。勿論、自分の生命に關する重大問題である以上、二千頁は愚か、二十萬頁にても讀まねばならぬは言ふ迄もないけれども、正直の所、聖書を突き附けられても、讀めない、また解らない。

しかし愛なる神は、勿論我等に不可能を强ひ給はない。「神は凡ての人の救はれて、眞理を悟るに至らんことを欲し給ふ」（テモテ前二の四）。この故に、神は凡ての人が容易に基督教の精神を了解し得る途を備へ給ふ。即ち我等は、聖書の何の一書、一章、一節、一句からでも、直ちに基督教の大精神に達することが出來る。恰度、一滴の水、一枚の朽葉から、直ちに自然界の秘奧の神殿に參入し得ると同樣である。宇宙が有機的の一體であるやうに、聖書が神の生命の言である以上、これは正に當然である。故に我等は創世記第一章一節、或はマラキ書の或る一章、或はマタイ傳の起句「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖」を以ても、其他何處に依つても、基督教の本質を了得することが出來る。

しかし、舊新約聖書中に於て、最も完全に且つ正確に、また最も簡單、平明に基督教の本質を顯す個所を求めるならば、多分左の三つであらう——

一　ルカ傳第十五章十一——三二節

二　ロマ書第三章二三——二六節

三　ヨハネ傳第三章十六節

今これ等を比較するに

第一は有名なる放蕩息子の譬話であつて、信者、不信者を問はず、如何なる人にも善く了解することができる。何と言うても、イエスの譬話中の白眉である。何人もこれを讀んで、神の有り難き親心に心を撃たれぬ者は無い。しかし、他の二者に比べて、この譬にキリストの十字架の贖罪が明白でないことが、その弱點である。（贖罪の思想があると言ふ學者もあるけれども、私は與しない。また、假令なくとも、この譬話が譬話の王たるを失なはない）。

第二のロマ書第三章は、基督教の中心眞理を言ひ表はして餘す所なしである。たゞ、神學者パウロの說明であるだけに、「義」であるとか、「宥の供物」であるとか言ふ如き難ヅかしき術語を用ひしために、初めて基督教に接する人に取りては、難解であることが、他の二者に比して不利益である。

ヨハネ傳第三章十六節は、ルカ傳の平易と、ロマ書の正確とを兼有し、而かも三者中最も簡單である。流石はヨハネである。ヨハネなればこそ、である。極めて平易なるギリシヤ語二十五字の中に基督教の全精神を盛り盡して餘す所がない。神の靈に動かされ中して、何人にこれが出來やう！（序に言ふ、「三章十六節」は凡てヨハネの書きしもの、即ち第一書、默示錄に於ても、夫れ〳〵有名な個所である）。

この故に私はヨハネ傳の「三の十六」を以て、全聖書中最もたやすく、最も手短かに、しかし、最も正確完全に基督教の本質を示せるものであると信ずる。

いまこれに依つて基督教の何であるかを說明し度い。

それ神は、その獨子を賜ふほどに世を愛し給へり。すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。

意味は明白である。神はこの世にその獨り子なるキリストを與へ給うた。世の人々がキリストを信じて滅亡より救はれ、永遠の生命に入るを得んが爲めである。神はこれ程までに此の世を愛し給うた、と言ふのである。し

かし、ヨハネの言はんとする所を明白にするには、この言葉の後ろに潜む歴史的背景を知らねばならぬ。

紀元前六、七年頃、ガリラヤのナザレの大工ヨセフにイエスなる子が生れた。年三十にして彼は自ら神の子なりと宣言して、神の國の來臨を說いた。彼を信ずる多くの弟子が出來た。ユダヤの宗教家達が彼を惡くみ、彼を訴へ、ローマ政府は、彼を磔殺した。之は今日の歴史家の等しく認むる歴史的事實である。歴史學の權威を認むる以上は何人も之を疑ひ得ない。勿論基督教に對する反感、その他爲めにする所があつて、キリストの歴史的存在を否定せんとする者あるは否み得ない。社會主義者幸德秋水の「基督抹殺論」がその一である。併し秋水は消え失せてもキリストは抹殺されない。獨逸のドレウス博士（A.Drews）の如きも、基督教を星辰の運行を以て說明し去らうとする。しかし歴史家は皆彼を一笑に附して居る。

地球上に生存せし人であつて、キリストほど、多くの人によりて傳記を書かれし人は、多分ないであらう。また彼の生涯ほど多くの歴史家によりて探索研究されし者もないであらう。故にたとひホーマー、ソクラテス、釋迦、孔子の歴史的存在が否定される時が來ても、イエスの歴史的生涯の否定される時は永遠に來ないであらう。

以上は冷靜なる歴史學の問題であるから、私はこれ以上深入り爲やうと思はない。特志家は直接歴史家と論議して貰ひ度い。ただ併し、ヨハネは單にこの歴史的事實を主張するのではない。彼は之に彼れ自らの說明、解釋、信仰的翻譯をつけた。我等は、歴史的事實は疑ひ得ないけれども、彼のこの說明、信仰は十分に之を吟味し、また疑ふことが出來る。

第一に、彼はイエスを以て神の獨子であると言ふ。しかし、先づ神なるものが果して存在するや否や、これが最大問題である。何人も之を學問的に證明出來ない。哲學者カントにして既に匙を投げた。殊に獨一無二なるべき神に子があると言ふが如きは、聖書自身としても矛盾せる思想である、と言ふことが出來る。實際ユダヤ人はこの理由を以て基督教に反對した。故に我等はヨハネの

との解釋を十分に疑ふ權利を有つてゐる。

第二に、ヨハネは、イエスが殺されたことを說明して、神が人類を愛する餘り、之を人類に賜うたのである、と言ふ。二十世紀の我等は、勿論千九百年前のガリラヤの漁夫の解釋を信ずべき義務はない。彼の單純なる信仰深さを愛し且つ尊敬しながらも。

第三に、最も可笑しいのは、斯く獨子を與へ給うたのは、彼を信ずることによりて、人類が罪を赦されて永遠の亡滅より救はれ、永遠の生命を與へられん爲めである、と言ふことである。愈々出でて、愈々奇なりである。人類が亡滅の運命を蒙うて居ると言ふことが可笑しい、永遠の生命の存否が疑はしい。誰が來世の存在を證明したか。獨逸詩人が歌うたやうに

六千年死は沈默して居る
曾つて一つの屍體が墓穴から上り來つたか

である。殊に、死んだキリストを信ずることに由つて、我等が永遠の生命を得、無限に生きると言ふやうなことは、餘りに滑稽であり。迷信の骨頂である。斯う現代人の最大多數は考へるであらう。しかして今日の精神病學者は、多分ヨハネを早發性痴呆性と診定するであらう。

ただ困るのは、若しヨハネが早發性痴呆性であるならば、彼と同じ信仰に生きたペテロも、パウロも、その他新約聖書の記者悉くが同じく精神病者となることである。否、キリスト彼自身が既に同じ病者である（現に日本の心理學者で、キリストを早發性痴呆性なりと診斷した人がある）。ただに彼等のみたらず、爾來千九百年、彼等に信じたる所の凡ての信者達幾萬幾億、大も小も、賢も愚も、それこそオーガスチンも、ダンテも、カントも皆同じく精神病者でなければならなくなる。然り、我等自身皆痴呆性でなければならぬ。

しかしこれは餘りに亂暴なる診斷である。若し今日の精神病學者が斯く診斷して動かないならば、我等は、カントを精神病者と診斷する醫者彼自身を精神病者と診斷し度い。この故に我等は他の說明を求めねばならぬ。而して、私の信ずる所に依れば、この事の唯だ一つの、正しい、最も單純平明なる說明は、ヨハネが解釋せし通り

が事實である、といふことである。即はち、神が存在し給ふこと、イエスは神の獨子であること、彼がこの世に生れたのは、神がこの世に遣はし給うたものであること、永遠の生命たるものがあること、人間はこの儘では亡滅すべき者であること、しかし、若しキリストを信ずれば、その亡滅の運命より救はれて、永遠の生命に入るを得ること――これ等のことが單にヨハネの迷信でなく、想像でなく、思想でなく、實に皆そのままに事實である。生きたる事實である。斯く說明する以外に、千九百年間、正直たる、健實なる人々がヨハネと同じ信仰に生き、その爲めには、その生命を棄つることを何とも思はなかつた、その儼然たる事實を說明すべき途はない、と私は思ふ。

またこれは單に最も合理的な說明であると言ふのみでなく、誰でもキリストを信ずるを得た人は、このヨハネの言ふ所が皆悉く活きた事實であることを自ら實驗し得るのである。また、實驗し得ればこそ、我等死をも恐れざる力を有つのである。若しこれが一の思想であり、說明に過ぎないならば、何人が、そのために磔にせられ、火に焚かるることを微笑みつゝ耐へ忍ばう。勿論我等信者も亦人間であり、近代科學を呼吸しつゝある者である以上、頭を以ては、神の存在、イエスの神性、永遠の生命の存在、罪の赦しといふが如き科學のメスを入れ得ず、試驗管中に實驗出來ざることを疑ふ者である。しかし、如何に我等の思想、學問が反對しても、自ら實驗したる神の愛と、罪の赦されし事實とは之を否定し得ない。私の全生涯が假令夢であつたとしても、信仰の實驗のみは確かな事實である。これは永遠に動かない。私の思想は變り、學說は動いても、私のこの實驗は動かない。天地が崩壞しても動かない。

これが基督敎である。我等人類は罪の故に亡滅の運命を捨つてゐる。神が之を愛し憫れみ、その獨子イエス・キリストを人として地上に遣はし、之を十字架につけ給うた。これを信じ、キリストに自分の全信頼を投げかけて、亡びより救はれ、永遠の生命に入ること、これが基督敎である。これだけである。簡單である。明白である。

人は信じ、神は彼に永遠の生命を與ふ。まことに、ただそれだけである。

これによつて解ることは、先づ、基督敎は歷史的事實の上に立つ宗敎であることである。哲學的體系ではない、思想ではない、藝術ではない。千九百年前に、この地球の上に於て起きし事實を基礎とするものである。從つて、若しこの歷史的事實が學問に於て窮極的に否定されるならば、基督敎は消え失せる。

次に、基督敎を人の側よりすれば、ただ「信ず」ることである。ただ信ずることであつて、事業をすることでは無い。修養することではない。ただ信ずることのみである。故に信ずることの出來るほどの人は「凡て」救はるることが出來る。一人の例外もなしに。即はち基督敎は、或る智的或は道德的特權階級者のみのものでなくして、萬人のものである。キリストの十字架に依り縋る者は「十人は十人ながら、百人は百人ながら」救はれ得る宗敎である。最も「デモクラチツク」な宗敎である。

而して信ずる者は、間違なく永遠の生命を受くることが出來る。基督敎は信者に、或は健康、或は富、或は家內の平和、世界の平和、或は心の平安、煩悶の解決、或は所謂大悟徹底、安心立命を與へるかも判らぬ、或は與へないかも判らない。基督敎は必ず之を與へると約束しない。否却つて其の反對を約束する（例之ルカ十二の四九以下、十八の十八以下、後テモテ三の十二等々）。その約束するものは、ただ永遠の生命である。永遠の生命の何であるかは他日詳しく說明するであらう。永遠の生命とは、死んでも生き、または永遠に死なざる生命力である（ヨハネ十一の二五、二六）。從つて、既に此世に於て、然り、信ずると同時に、直ちに與へられるものである。これあるが故にこそ我等は死を恐れない。常に新らしき力を得、鷲の如く翼を張りて天空を雄飛することが出來る。またこれを有つときに、我等の凡ての渴きは醫されて、我等は何等の不足を感じない。

これが基督敎である。最も簡單なる、最も容易なる、しかし最も深奧なる、また神の恩惠の滿ち溢れし宗敎である。この故にこそ之を福音と言ふ。

イエス語集

新約聖書中に集錄された主イエスの言を出來るだけ年代順に排列し、之に極めて簡單な說明、感想等を附記し度いと思ふ。聖書に於て讀む場合と異りたる、深き意味、强き力を感得するであらう。

一

其の兩親に（エルサレムの宮に於て）

何故われを尋ねたるか。我はわが父の家に居るべきを知らぬか（ルカ傳二章四九節）。

十二歲のイエスの言である。また彼の言として聖書中に記錄されてある最初のものである。

「家に居る」は、また「事を務む」とも譯することが出來る。大した意味の相違はない。しかし此の場合は「家に居る」と譯せし方が適當であらう。

子がその父の家に居るべきこと程世に當然且つ自然なることはない。神の子イエスが、その父なる神の家であるエルサレムの神殿に居給ふことに優りて、當然なることはない。併し彼の兩親は悟らなかつた。彼等は血眼になつて、神殿外にイエスを尋ね求めた。イエスには、何故兩親が「父の家」の外に彼を尋ね探せしかが判らなかつた。

人類は父の家をさまよひ出でし迷ひ子である。しかも人はそれに氣付かない。偶々ある人が其の眞の父の家を見出して之に歸れば、彼の近親友人は驚き悲しみて其の「迷ひ子」を尋ね求める。まことに人生の大なる喜悲劇である。

「我はわが父の家に居るべきを知らぬか」。この一句こそイエスの全生涯の縮圖であり、彼の福音の主題であり、また結晶である。而してこの最初の發言が、十字架上の彼の最後の發言に對應する（ルカ傳二三章四六節）。

まことに、格體は双葉より香ぐはしくある。ダイヤモンドはその如何なる小破片と雖、燦然たる靈光にかがやいて居る。

ヨハネ傳講義（第一回）

ヨハネ傳の讀み方

「若し或る學者があつて、聖書を悉く壞滅することに成功したとしても、ロマ書とヨハネ傳とが一冊殘存するならば、基督敎は決して消滅しないであらう」と改革者マルチン・ルーテルが言うたと傳へられる。ロマ書が書簡中の書簡であるごとく、ヨハネ傳は福音書中の福音書である。

嘗に福音書中の福音書であるばかりではない。或る見方よりすれば、新約聖書の絕頂である。基督敎はヨハネ傳に於て花咲いたと言ふことができる。何故なれば、その書かれし年代に於て、之が新約聖書中最も新らしきもの、即ち、基督敎の最も圓熟せし時に書かれしものであることは、今日の學者の等しく認むる所である。共觀福音書的基督敎と、パウロ的基督敎とが、合流してヨハネに注入したと言ふことができる。故にヨハネ傳を理解することは、共觀福音書のキリストを理解することであり、パウロを理解することである。また、眞に三福音書とパウロとを解する者は、必ずやヨハネ傳に到らざるを得ない。

ヨハネ傳は斯くも重要なるものであるに拘らず、一般に極めて了解困難なる書とせられる。（例へば註解書の如きも、ヨハネ傳が新約聖書中一番の難物として取り扱はれる。現に「萬國批評註解」に於ても、ヨハネ傳が殆んど最

後に、而かも二冊七百頁の大冊として最近に出版された)。從つてこの書は、聖書知識が進み、信仰圓熟したる後に讀むべきものとせられる。何故に斯く困難とせられるか、また、果してこれは了解困難であるか。

本書の研究が困難であるとせらるる主なる理由は、聖書批評學上の多くの解き難き問題が、之に絡みついて居るからである。本書の著者は果して何人であるか。使徒ヨハネであるか、或は所謂長老ヨハネであるか。或は他の或る人であるか。ヨハネ書及び默示錄は同一人の手になりしものであるか、如何。これは新約批評學上最も興味あるものであると同時に、最も解決困難である。次に本書と前三福音書(共觀)との關係如何。ヨハネ傳記者は三福音書の存在を知りしや。若し然りとせば、何の爲に殊更に之を書いたか。補充のためか、否定のためか、訂正のためか。またヨハネ傳のキリストと、三福音書の夫れとは、何れが果して歷史的であるか。兩者は果して調和し得べきや。ヨハネ傳とパウロ書簡との關係如何。またヨハネのキリスト論と(ブル書のキリスト論との關係如何。神秘主義の影響、アレキサンドリヤ哲學との關係如何。彼は何の目的を以て之を書いたか。著者は歷史家であるか、戲曲家であるか。ヨハネのキリストは、どこまでがキリストであり、どこまでがヨハネ彼自身の着色であるか、等々である。各問題の爲めに、我等は數十冊の本を讀まねばならぬ。若し斯かる問題がヨハネ傳了解の前提であるならば、我等は永遠にこの書に親しむことはできないであらう。

勿論、然らずである。然るべき筈がない。福音書であり、キリストの福音を傳ふるものであるならば、そんなに難づかしい本であるべき筈がない。神學者の厄介にならずに、何人にても容易に之を讀み、之を了解し得べき筈である。私の信ずる所によれば、或る點よりすれば、ヨハネ傳は新約中最も初學者向である。先づ、その用語の何んと平易であることよ。またその表現法の、何んと小兒らしく單純なることよ。正に聖書中の壓卷である。之をロマ書と比較して、直ちにその事を證することができる(試に、本書第三章十六節とロマ書第三章二三—二六節を比較せよ)。即はち、ヨハネ傳は決して神學者のため、または特に信仰圓熟の者のための書ではなくして、寧ろ一般平信徒に福音を證するためのものであると私は思ふ。而して、このことはヨハネ傳自身が我等に之を表明する。即はち第二十章三〇、三一節に言ふ——

この書に錄さざる外の多くの徵を、イエス弟子達の前にて行ひ給へり。されど此等の事を錄ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲なり

これがヨハネ傳の結尾であり、また著者自身が表明せる本書の目的である(第二十一章は追錄である。このことに就ては凡ての學者の意見が一致する)。即はちヨハネ傳の目的は簡單明白である。イエスが神の子キリストであることを人々に信ぜしめ、以て彼等を永遠の生命に入れんが爲めである。即はち飽くまでも福音を傳へんが爲めである。而して、既に福音を傳へんとするものである以上、これは凡ての人によりて了解され得るものでなければならぬ。聖書學者、牧師、傳道師のみの專賣品であるべきで無い。

しかし、事實果して然るか。ヨハネ傳は果して何人にも了解せられ得るか。この事は開卷第一に

初めに言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき、……萬の物これに由りて成り、成りたる物に……

と讀み始むるときに、直ちに裏切られる。何の事であるか解らない。初學者のみならず、十年二十年教會通ひをした者にも解らない。曾て或る宗教々師が或る高等專門學校のバイブルクラスにて、半歲を費して、ヨハネ傳一章の

數節を講了し得なかつたと聞いた。若しこの言（ロゴス）とフイロのロゴスとの關係如何といふ如き問題に關はり附かれるならば、假令一年を費すも、第一節のみを講じ得ないであらう。

故に我等はヨハネ傳の讀み方を知らねばならぬ。

一　先づ第二十一章を除く。上述の如く附錄であるからである。

二　次に第二十章三〇、三一節を除く。これは本書の目的を書いたもので、附言であるからである。

三　次に第一章一―十八節を除く。之は序論であつて、多分ヨハネ（ヨハネ傳記者と言ふべきを略して便宜斯く言ふ）は之を最後に書いたか、或は、後に言ふ如く、少くともヨハネのキリスト觀發達史よりすれば、之が最後に來るべきものと信ずるからである。

斯くして第一章十九節より第二十章二十九節が殘る。これがヨハネ傳の本體である。而してこの部分は共觀福音書と同じく、洗禮者ヨハネの出現に始まり、イエスの復活に終つて居る。而して全體が、前掲のヨハネ傳の目的に表明されてある如く、ナザレの大工の子イエスが、神の子であることを證明せんとすることに始まり、之に終つて居る。即はち洗禮者の證明に始まり、イエス自身の、弟子トマスに對する證明に終つて居る。而てこの本體は第十二章を以て二分される。第一章十九節より第十二章末節までには、洗禮者の證明に續いてイエス自身の一般人――ヨハネ之を「世」と言ふ――に對する神の子たることの證がある。第十三章より第二十章二十九節までは、その前半（第十二章―第十七章）が弟子に對するイエス自身の證、また遺言であり、後半（第十八章―第二十章）が十字架上の死と復活による、神の子たることを證することに焦點する。而して、第

二十章二十八節の「わが主よ、わが神よ！」なる懷疑者トマスの告白を以て、戲曲的大團圓に達して居る。

若しヨハネ傳を書きし者が使徒ヨハネであつたならば、彼は三年間イエスに師事し、「その懷に倚り」て親しく彼に接した。即はち彼にとりてイエスは彼が親しく「聞きしところ、目にて見し所、つらつら觀て手觸りし所のもの」であつた（ヨハネ第一書一の一）。初めて洗禮者によりてキリストなることを證せられしときには、彼は半信半疑であつたでもあらう。しかし彼は三年間に多くの驚くべきものを見、また聽いた。彼はパンの奇蹟を見た。ラザロの復活を見た。遂にはイエス自身の復活を見た。トマスの告白は、勿論ヨハネ自身の告白であつた。彼にとりてイエスは人では無かつた。父なる神の懷裡にいます獨子の神としか思へなくなつた（一の十八）。彼は宇宙開闢の前より神と偕にいまし給うた者であり、然り、全宇宙の創造者以外の者ではあり得ない。さうでなくして、何ぞうして斯んな偉大なる能力を有ち得やう、と彼は思うた。頭は疑つた。しかし彼の實驗は、遂に彼を斯かる結論に追ひやつた。

しかし彼は、世界開闢の太初より神と共に存在し、宇宙萬有を創造りし人を何と名づくべきかを知らなかつた。それは未だこの人類の見しこと、考へしことなき或ものであつた。人類はそれに對する言葉を有たなかつた。已むを得ず彼は當時の人々に最もよく彼の言はんとする意味を傳ふべき語としてロゴス（Logos 言、または理の意）なる語を假用した。これがアレキサンドリヤ哲學の用語であつたか、ヘブルの Memra の翻譯であるかは、判明しない。また必ずしも大問題でない。或は之をXYZ等の文字を以て代用するも、必しも不都合はあるまい。要は、肉體の人として生れ、彼が師事せしイエスとなりし或もの、太初に神と偕にありし或もの、萬物を創造りし或もの、然り、神なりし或者でありしことを言ふを以て足りた。之にロゴスなる語を假用するか、或は他の語を用ふるかは

必ずしも大問題ではなかつた。

斯くして第一章一節—十八節の序言は成つた。ヨハネの信仰發達史よりすれば、この序言は、トマスの告白の後に來るべきである。故に我等も亦、第一章十九節のヨハネの出現より始めて、トマスの告白に至り、最後にこの序言を讀むならば、ヨハネの思想發展の徑路を知るのみならず、容易にヨハネ傳の言はんとする所を了解し得るであらう。即ち多くの他の著書に於ける場合と同じく、序言は後廻しにするが便利であり、賢明である。

たとヨハネ傳は之を一の音樂、特に一の交響樂として見るときに、理解が容易である。例へばベートーベンの第五交響樂を聽くが如くにヨハネ傳を讀むべきである。ここに二つの主題がある。一は光であり、他は暗である。神の子對サタン、或は神の力對此の世の惡の力である。この兩主題が序曲たる序言に於て表はれ、順次交響互錯して最後に光の勝利、神の子の勝利に歸して終曲となるのである。恰かもチヤイコウスキの名曲「千八百十二年」に於て、露佛兩國歌が爭ひ戰ひつつ、遂に佛歌が露歌に壓服せらるるが如くである。若しベートーベンの如き偉大なる作曲家によりてヨハネ傳が交響樂となるならば、多分世界最大の交響樂であるであらう。

光が暗に照り出でる。光がその力を增すごとに、暗もまたその暗さを增す。遂に光がその絕頂に達したときに、暗さも亦その絕頂に達して一時光を蔽ひ去る。しかし直ちに再び光が暗を壓服して遂に光の世界と化する。これが「ヨハネ交響樂」である。これが、キリストの生涯である。また人生である。また神の宇宙經綸である。

以上が私のヨハネ傳の讀み方である。頗る何でもないことである。しかし此のなんでもないことの解ることは、私にとり、ヨハネ傳の解ることであつた。

譬話の研究（第一回）

譬話とは何ぞや

「新らしき葡萄酒は、新しき革囊に入るるなり」とイエスは言ひ給うた（マルコ二の二二）。イエスの福音は、人の眼が未だかつて見たことのない、耳が聞いたことのない、人の心がかつて思うたことのない、全然新しいものであつた。故に、この新しい福音を盛るべき器も亦新しいものでなければならなかつた。而してこの尊き器として選ばれしものが所謂「譬話」である。

譬話はイエスの言語に依る傳道の精華である。他の如何なる語法、說話を以ても傳へ得ざるものを、彼は譬話を以て爲し給うた。譬話の中に、最奧の眞理、彼の福音の眞面目を見出すはこの故である。一見極めて幼稚なる說話法の如くである。日曜學校の小兒と雖、容易に之を了解することが出來るやうに思はれる。しかし、こゝにイエスの福音の心髓は藏されてある。譬話を味解することなしには、何人も基督敎の眞髓に觸れたと言ふことはできない。殊に譬話は後に詳述する如く、人間界、自然界の活事實に、天國の活眞理を盛りしものであるが故に、我等はその中より無限の眞理を汲み出すことが出來る。一つの譬話の中より十のロマ書、百のヘブル書を讀み出すことが出來る。（試みに「パリサイ人と取稅人」の譬話とロマ書とを比較せよ）。一滴の水の含む眞理は、百のエヂソン、千のア

インスクインよりも大である。

然らば譬話とは果して何であるか。譬話はまた喩話、或は譬喩と言ふ。英語の Parable ギリシヤ語の Parabole の譯語である。原語の意は「側に投げる」para-ballein である。一の事物の側に他の事物を並べて、比較說明する、の意である。說明方法の一である。勿論譬話は必しもイエスを以て始まつたのではない。舊約聖書に於て既にマーシヤール Mashal なるものがあつた。新約の譬話に相當するものである。元來ユダヤ民族は抽象的思索を好まず、比類なき想像力の所有者であるが故に、斯かる具象的說話法に長じた。しかし舊約に於けるマーシヤールは到底イエスの譬話に較ぶべくも無く幼稚である。(試に、その最も優秀なるものと認められるもの、例之イザヤ書第五章、エゼキエル書第十七章、サムエル後書第十二章にあるものを參照せよ)。譬話に於てもイエスは古今獨歩である。他の追隨を許さない。彼の前に譬話なく、彼の後に譬話なし。

譬話の何であるかを明白にする爲には、之と類似せる比喩、寓喩及ひ寓話との區別を明白にする必要がある。

比喩 Metaphor, Similitude と言ふは、單なる譬であつて、譬話の如く一の話を成さざるものである。例へば「汝らは世の鹽なり」(マタイ傳五の十三)、「我は世の光なり」(ヨハネ傳八の十二) と言ふが如きである。しかし兩者の差異は主としてその長短、單複にあるが故に、或ものに就ては比喩、譬話の何れに屬するかが判然しない。(例之マルコ傳三章二二節以下)。從つて學者によりて譬話の數を異にする。しかし要之、イエスの說話の或ものを兩者何れと見るかといふだけのことであつて、實益少なき問題である。之に反し

寓喩 Allegory と譬話との差別は、解釋上に重大なる影響を有つて居る。寓喩とは、說明のために使用せられた

る喩(たとへ)の材料の一つ〳〵に悉く意味を寓せしものである。エゼキエル書第十五、十六、十九、二三、二八章等、ダニエル書第二、四、七、八章等がこれであり、新約に於ては默示錄十一、十二、十三、十七章等がこれであると言ふ。しかし、或るものが譬話であるか或は寓喩であるかは、說話の形式を以ては區別し得ない。說話者の目的如何にある。從つて同一の說話を或る人は譬話として解し、或る人は寓喩として解する。例之ルカ傳第十章、三十節以下にある有名なる「善きサマリヤ人」の譬話に就ても、或る學者は之を寓喩なりとも、或は、譬話なれども之を寓喩的に解すべきものであるとして、エルサレムとは何か、エリコとは何を意味するか、强盜とは如何、衣を剝ぐとは如何、と一々之に深き意味をつけんとする。

この點に就き明白なる說明を與へし者が獨逸の A・ユーリツヘルである。彼は千頁に亦んとするその大著「イエスの比喩的說話」(A.Jülicher, Gleichnisreden Jesu) に於て、寓喩は個々の材料に夫れ〳〵意味を寓するものである。譬話は或る單一の眞理を說明する爲めに多く材料を使用せしものである。イエスの譬話は之を譬話として解すべく、寓喩的に解すべきに非ずと喝破した。餘りに一方に偏したりとの非難なきに非されども、古來の學者達がイエスの譬話を寓喩として取扱ひ、その爲めに生ける譬話を死物と化して、イエスの眞生命を蔽ひゐたりし弊を破りしその功績を沒すべくもない(尙このことに就ては「譬話は如何に解すべきか」の項に詳說する)。

最後に寓話 Fable は譬話とその說話の材料によりて區別される。譬話は人間界、或は自然界の事物或は事件そのまゝを取り來りて、之をして或る眞理を說明せしめんとするものであり、寓話は有名なるイソツプの寓話に於て見る如く、或は人と動植物と語り、或は動植物相互に語る如く、「作り話」である。前者は材料として使用せらるる話

それ自身としても、人間界、自然界の生きたる眞の事實として、我等の心を動かすものであるに反して、後者は或る目的のために人間界、自然界にあらざる事實を、ある如く假造したるものである。而してその不自然なる點に於て人の心を動かさんとするものである。尙、その說かんとする眞理が一は神の國の消息に關するものであり、他はただ此の世の道德、處世訓等に關するものであるは言ふ迄もない。勿論寓話中にも自然的事實をそのまま使用せるものがあり、イエスの譬話中にもマタイ傳第十二章四十三節以下の如きものもあれば兩者の境界は必しも明白でない。

以上を以て、極めて簡單ながらに、少しく譬話の輪廓を明白に爲し得たと思ふ。寓話とは、地上の活ける事實を捉へ來つて、神の國の消息を說明せんとしたものである。換言すれば、天界のことを、地上のことを以て翻譯せんとしたものである。活ける神の國の事實は、活ける事實を以てする外に說明の途がない。而して眞實なる神の國の消息を傳ふるには眞實なる事實によるの外はない。寓話に依り得ざる理由が玆にある。また天の眞理であるが故に、地上の事物を以て一々正確に寫眞の如くに之を寫出することは能きない。寓喩であり得ない理由が玆にある。

我等はイエスの譬話を讀むごとに、彼が眞に神の子であり、また同時に眞の人の子でありしことを信ぜざるを得ない。神の懷裡にありし事なき何人に、また完全に人の子ならざる何人に、イエスの如き譬話を爲すことが出來やう。神の心を知りし人、人の心を有ちし神の子にのみこの譬話は生まれる。彼は神の國のことを、父ヨセフの家の勝手を知る如くに知り給うた。而して放蕩息子、種播き人、亡ひたる羊等の譬話に表はれしイエスの人と自然とに對する觀察の如何に深きかを見て、何人も彼以上に人の子であり、自然の同情者であり得ないことを知る。我等は譬話に於て天と地との接物を見る。

雜感雜錄

○一九三〇年一月一日、わが「聖書知識」が茲に產聲をあげる。長かりし産苦よ！いまイザヤ書第四十章が私の歌である――

なぐさめよ、汝等わが民をなぐさめよ、懇ろにエルサレムに語り之によばはり告げよ、その服役の期すでに終り、その罰すでに赦されたり、と。

一九三〇年は私にとりヨベルの年である。

○「聖書知識」の名附親は恩師內村鑑三先生である。まことに、善き名であると自ら誇らしく思ふ。

○また私は二十年先生に師事した。滿六年先生と誘掖を共にし、五年間先生の「聖書之研究」誌に執筆する光榮を有つた。本誌の成る、勿論之を先生に負ふ。

○しかし本誌は本誌であつて內村先生ではない。先生の動靜感化によつて生れ出たものではない。飽くまで本誌自の發意決心に依るものである。名實共に彼の個人雜誌であり、獨立雜誌である。從つて本誌の言論その他の責任は、凡て本誌一個人の上に蔕すべきは言ふ迄もない。

○言ふ迄もないことなれど、先生との關係が餘りに密でありしが故に、累を先生に及ぼさんことを慮れて念の爲に之を言ふ。

○わが友藤井武君はその「舊約と新約」誌上に於て、本誌と主筆を紹介して「日本は彼に於て珍らしい傳道者を見いだした。彼の雜誌は見事であらう。敎會人はさぞ驚くであらう」と言うて呉れた。

○日本は確かに彼に於て珍傳道者を見いだした。淡禮なく、敎會なく、神學無き珍らしき傳道者？である。お茶漬にて物見高い東京では、この珍傳道者の丸の內講演は滿會ひつつある。感謝たるかな。

○虎は野に放たれたけれども、敎會は驚く必要なし。此虎は張子の虎である、雨にでも會うたならば、グニヤ〳〵になるであらう。

○藤井君が言うて呉れるやうに、美事な雜誌に仕度きは山々なれど、無い袖は振られず。來る人を捉へては「給ふた」か「給うた」かと訊いてゐる始末である。パウロばりに「寧ろ次に寄びてわが惡文を誇らん」かな。

○用來るだけジミな、無愛想な雜誌にし度く思ふ。讀者本位でなく、キリスト本位、眞理本位、聖書本位であり度く思ふ。ジャーナリズムは坊主と共に賤しむべきである。一は讀者を喰ひ物にし、他は神を喰ひ物にす。共に眞理の敵である。

○本誌は毎月をふらず、ただ聖書の研究だけに止まり度く思ふ。一つミツサリ聖書を讀んで見度い。ただ一つの例外として、長年の宿願であるダンテの研究だけはその內始めて見度い。

本誌定價

一冊　貳拾錢
六冊前金（半年分）　壹圓拾錢
十二冊前金（一年分）　貳圓貳拾錢
但し郵送無料
外國行十二冊分前金（郵稅共）參圓
直接本社宛て申込の方は振替口座東京四三三番を御使用下さい。

昭和四年十二月廿二日印刷納本
昭和五年一月一日發行

編輯發行兼印刷人　東京府駒澤新町一七三三　塚本虎二
發行所　聖書知識社　東京府駒澤新町一七三三
印刷所　東京芝區愛宕町二ノ一三　宮崎印刷所
發賣所　東京市麴町區九段坂　向山堂書房
振替口座東京六二七三三